

D-6

繫辞残留現象

中野晃希（大阪大学大学院）

日本語では、助詞がその付加していた要素を伴わずに助詞のみで現れることが出来ると報告されており、これは助詞残留現象と呼ばれる。助詞残留現象は様々な助詞で観察されており、名詞について現れる格助詞やとりたて助詞、後置詞だけでなく、文に後続して現れる補文標識や繫辞でも同様の現象が報告されている。本発表では、この繫辞が残留する場合を助詞残留現象と区別するために、繫辞残留現象と呼ぶ。助詞残留現象に関しては近年になってその統語的分析が行われ始めたが、名詞が省略される助詞残留現象とは異なり、省略される要素が文である繫辞残留現象の統語的分析に関しては、未だあまり議論されていない。本発表では、繫辞残留現象が助詞残留現象とは異なる振る舞いを見せることを観察したのち、Sakamoto and Saito (2017, 2020) の分析を基に、繫辞残留現象が省略によって派生されていることを議論する。最後に、「文が省略される」残留現象（補文標識・繫辞）の類似性を指摘することで、助詞残留現象とは異なる現象としての分析が必要であると主張する。

1. はじめに

日本語では、ある単語に付加していた助詞がその単語を伴わずに現れる現象が報告されており、助詞残留現象と呼ばれている。(1) では、名詞「太郎」に付加している、主題を表す助詞「は」が残留していると考えられる。

(1) A: 太郎はもうご飯を食べたって？

B: [△は] まだご飯を食べてないはずだよ (“△”は音のない要素を示す)

また、助詞残留現象の一種として、(2) のように繫辞「だ」が残留する場合も報告されている。本発表では、この繫辞が残留している場合を助詞残留と区別するために、繫辞残留現象と呼ぶ。

(2) A: 太郎がまた宿題を忘れたんだって B: [△だ]と思ったよ

本発表では、①繫辞残留現象が助詞残留現象と全く異なる性質を持つことを観察し、②繫辞残留現象が省略によって派生されていることを議論したのち、③「文が省略されている」残留現象（補文標識・繫辞）はその内部構造がノダ文である持つことを主張する。

2. 助詞残留現象

これまで、助詞残留現象は様々な助詞において可能であると報告されている (服部 1949, 1960, 吉田 2004, Sato and Ginsburg 2007, Nasu 2012b, Sato 2012, Shibata 2014, Sakamoto and Saito 2017, 2020, Sato and Maeda 2019, Yamashita 2019)。

(3) a. A: 太郎がどうしたの？

B: [△が]会社を辞めたらしいよ

b. A: 太郎をどうしたの？

B: [△を]首にしたよ

c. A: 君は太郎の犬を見たことある？

B: [△の]犬は見たことないかな

d. A: 太郎も来たの？

B: [△も]来たよ

e. A: 太郎だけ来なかったの？

B: [△だけ]来ませんでしたね

f. A: 東京から来たんだって? B: [△から]来たよ

また、名詞に付加している助詞だけでなく、文に付加している助詞も残留することが報告されている。

(4) A: 太郎は来たの? B: [△と]思いますけど B': [△か(どうか)]ちょっとわかりませんね

以下から、これら助詞残留現象に共通してみられる性質と、先行研究の分析を概観する。まず、助詞残留現象の特徴的な性質として、必ず文頭に現れなければならないことが挙げられる。

(5) A: ジョンは今日何をしているの?

B: a. [△は]メアリーに大学で会っているね b. *メアリーに[△は]大学で会っているね
c. *メアリーに大学で[△は]会っているね (Sato 2012)

(6) a. ジョンはその時自分は天才だと思った

b. *ジョンはその時[△は]天才だと思った (吉田 2004)

(7) A: ジョンが仕事を辞めるって?

B: [△が]仕事を辞めるかどうかは知らないけど、そういう噂はある (Shibata 2014)

一見すると (6) のように主節現象であると考えられるが、(7) のように埋め込み節（副詞節）にも生起可能であることから、文頭に生起することが条件であると考えられる。この制約はかなり厳しく、間投詞や接続詞等、どのような要素であっても助詞残留箇所にも音韻的に先行する要素があってはならない。

(8) a. A: ジョンは来るの? B: *えっと、[△は]来ません (Shibata 2014)

b. A: ジョンは来るの? B: *確かではないけど、[△は]来ませんよ (Sato and Maeda 2019)

もう一つの性質として、複数の助詞（補文標識）が共起した場合、一番右の補文標識のみが残留可能である。日本語には3つの補文標識があり、(9) のように特定の環境下で共起することができる。

(9) 太郎は彼の妹がそこにいた(の)か(と)みんなに尋ねた (Saito 2013)

この時、助詞残留が許されるのは一番右の要素（補文標識）のみであることが観察されている。

(10) A: 花子は彼女の兄がそこにいたのかとジョンに尋ねたんだっけ?

B: a. 彼女の兄がそこにいたのかとビルに尋ねたんだよ

b. *[△の]かとビルに尋ねたんだよ c. *[△か]とビルに尋ねたんだよ

d. [△と]ビルに尋ねたんだよ (Sakamoto and Saito 2020)

(11) A: 花子は彼女の兄がそこにいたのかとジョンに尋ねたんだっけ?

B: a. 彼女の兄がそこにいたのかとビルに尋ねたんだよ b. *[△の]かビルに尋ねたんだよ

c. [△か]ビルに尋ねたんだよ (Sakamoto and Saito 2020)

次に、助詞残留時に省略される名詞句の分析を概観する。助詞残留時に音のない要素となる名詞には、音形をもたない代名詞（空代名詞）であるか、省略が生じているかの2通りの可能性がある。Sakamoto and Saito (2017) では、発音されない名詞句が、空代名詞ではなく省略によるものであると分析している。そのことを確かめる為に、空代名詞と異なり削除では言語的先行詞が義務的であることをテストに用いている（参照：Hankamer and Sag 1976）。

(12) 文脈（非言語的先行詞）：メアリーはとても可愛い女の子で、クラスの男の子全員がメアリーに恋をしている。そのメアリーが教室に入ってきた。

- a. 彼女が来た！ （代名詞） b. [pro] 来た！ （空代名詞）
 c. #[Δが]来た！ （助詞残留） (Sakamoto and Saito 2017)

ここで、(12a) では代名詞、(12b) では発音されない(代)名詞が用いられており適切に解釈されるが、助詞残留は許されない。(3a) では言語的な先行詞を伴っての「が」格の残留は許されていた為、助詞残留現象における発音されない名詞は空代名詞 (pro) ではなく、言語的先行詞が義務的に必要な削除によって派生されると考えられる。もう一つの助詞残留現象が削除であることを示すデータとして、Sakamoto and Saito (2020) では抜き出しを用いたテストを行なっている。空代名詞であれば内部構造を持たない為そこからの抜き出しが不可能であるのに対して、省略であれば発音されないだけで内部構造は存在し、そこからの抜き出しが可能となるはずである。(13a) は日本語の分裂文であり、焦点位置に派生している後置詞句に対応する演算子 (Op) が空所 (e) に痕跡を残して移動していると分析される。そのことは、関係節からの抜き出しを禁止する島の制約により (13b) が非文法的になることから分かる。

- (13) a. [ジョンが[メアリーが e_i お金を借りたと]思っているのは][後置詞句この銀行から]_i だ
 b. *[Op_i ジョンが[[島 t_i お金を借りた]人]を知っているのは][この銀行から]_i だ
 (Sakamoto and Saito 2020)

この空演算子分析を仮定すると、空演算子が抜き出される箇所が発音されないような助詞残留現象が文法的であれば、助詞残留現象からの抜き出しが可能ということを示し、省略であることを指示することになる。実際、(14) が文法的になることから、助詞残留現象は省略によって派生されていると考えられる。

- (14) A: [Op_i [メアリーが t_i お金を借りたと]ジョンが思っているのは][この銀行から]だよ?
 B: [Op [TP Δ]と彼が思っているのは][あの銀行から]だよ (Sakamoto and Saito 2020)

2章では、助詞残留現象に特有の性質と、その分析を概観した。その性質として、助詞残留現象はかなり限定された環境でのみ生起可能であり、Sakamoto and Saito (2017), (2020) の分析から、空代名詞ではなく省略によって派生されていることが分かった。次に、ここで扱ったデータを元に、繫辞残留現象と助詞残留現象を比較する。

3. 繫辞残留現象

以下に再掲した繫辞残留現象は、これまで助詞残留現象の一種として報告されてきた (Yamashita 2019, Sakamoto and Saito 2020)。

(15) A: 太郎がまた宿題を忘れたんだって B: [△だ]と思ったよ

しかし、助詞残留現象とは省略されている要素が異なることから、繫辞残留現象に同様の分析を当てはめる事は出来ない。本章では、その性質を比較することで、助詞残留現象とは異なる現象であることを示し、個別の分析が必要であることを議論する。以下から、両現象がそれぞれ全く異なる性質を持つことを見ていく。まず、助詞残留現象はその性質として必ず文頭に生起しなければならなかったが、繫辞残留現象は文頭以外の場所に生起することができる。

(16) A: 太郎が犯人だと思う?

B: (えっと、)(確かではないけど)だと思うよ / だと聞いているよ

B': (えっと、)(確かではないけど)[太郎が犯人]だと思っているよ / 聞いているよ

C: (少なくとも花子は)だと思っているよ / だかどうかわからないみたいだよ

C': (少なくとも花子は)[太郎が犯人]だと思っているよ / だかどうかわからないみたいだよ

(16A) の質問に対して、(16B) では間投詞や接続詞が先行していても繫辞残留は容認可能である。また、(16C) では先行する名詞句が先行していても容認可能である。(16B') と (16C') はそれぞれ発音されない節が顕在的にも容認されることを示す。助詞残留現象では、どのような要素であっても音韻的に先行する要素が存在すると容認不可能であるという厳しい制約があったのに反して、繫辞残留現象では文頭に生起しなければならないという制約が全く見られ無くなっている。

次に、複数の助詞 (補文標識) が共起した際には、最後の助詞 (補文標識) のみ残留可能であるという性質も、繫辞残留現象の場合には見られない。

(17) A: 花子は彼女の兄がそこにいたの**だか**ジョンに尋ねたんだっけ?

B: a. **か**ビルに尋ねたんだよ

b. **だか**ビルに尋ねたんだよ

c. ***のだか**ビルに尋ねたんだよ

d. 彼女の兄がそこにいた**のだか**ビルに尋ねたんだよ

(18) A: 花子は彼女の兄がそこにいた**のだ**とジョンに伝えたんだよね?

B: a. **と**ビルに伝えたんだよ

b. **のだ**とビルに伝えたんだよ

c. ***ののだ**とビルに伝えたんだよ

d. 彼女の兄がそこにいた**ののだ**とビルに伝えたんだよ

ここで、繫辞も助詞であるとする助詞残留現象では、複数の助詞「の/だ/か/と」が共起した場合、一番右に生起する助詞のみが残留可能であるはずだ。しかし実際は、(17) では「だか」、(18) では「のだ」が共起したまま残留することができる為、ここでも助詞残留現象と繫辞残留現象は異なる振る舞いを見せる。ただ、(17B) も (18B) も、補文標識「の」が生起していると容認できなくなることから、繫辞「だ」が助詞ではないと考えると、助詞「の/か/と」は未だ一番右の助詞のみが残留可能であるという制約に従っている可能性はある。

助詞残留現象に特有なこの二つの性質が全く異なることから、繫辞残留は助詞残留とは異なる現象であると考えられる。そうすると、先ほど概観した助詞残留現象の削除分析をそのまま繫辞残留現象に当てはめることはできなくなる。そこで、以下から上述した Sakamoto and Saito (2020) の議論に従って、繫辞残留現象が削除現象である可能性を個別に議論する。以下が言語的先行詞のテストである。

(19) A: この足音は花子だね B: だと思うよ

(20) Context: 花子の足音はいつも大きく、その音を聞くと見ていなくても花子だと分かる。

今日も大きな足音を立てながら彼女が教室に入ってきた。

B: だと思ったよ/だと思いました (cf. 花子が来たのだと思ったよ)

(19) は言語的先行詞を伴った場合で、(20) が非言語的先行詞の場合であるが、非言語的な文脈を先行詞としている (20B) が容認可能であることから、一見、繫辞残留現象は省略ではなく代用形によって派生されていると考えられる。しかし、他の例を見てみると全く異なる結果が得られる。

(21) A: 太郎はもう宿題を終わらせたの?

B: だと {報告していたよ/聞いているよ/だか(どうか)分からないね}

(22) a. Context: 太郎がまだ宿題を提出していないのに提出したことになっているという噂を聞き、先生に密告した。そして一部始終を見ていた同級生に話しかけた。

B: #だと報告したよ/だと聞いていたんだ/だか(どうか)まだ分からないけどね

先ほどとは反対に、非言語的な文脈を先行詞としている(22B) は容認不可能であり、このテストは省略によって派生されていることを示す。ここで、最初にテストした代用形によって派生される場合をもう少し詳しく観察する。繫辞残留現象「だと思ったよ」の形を少し変えた(とりたてて助詞を付加した)場合が以下である。

(23) A: 太郎が犯人だって!

B: a. だと(だけは)思わなかったよ b. だとも思った(ことはあった)けど、驚きだね

(24) Context: 花子の足音はいつも大きく、その音を聞くと見ていなくても花子だと分かる。しかし今日大きな足音を立てながら教室に入ってきたのはいつもお淑やかな百合子だった。

B: a. #だと(だけは)思わなかったよ b. #だとも思ったけど、驚きだね
c. 百合子だと(は)思わなかったよ

先ほどとは反対に、非言語的な文脈を先行詞とした (24B) は容認不可能となっている。このことに加え、「だと思ったよ」以外に非言語的先行詞を許容する表現が見られないことから、「だと思ったよ」という表現がある程度定着した(文法化した)表現であり、繫辞残留現象とは異なる振る舞いを見せていると考えられる。また、繫辞残留現象が省略によって派生されることは、抜き出しのテストからも分かる。

(25) A: [Op₁ [メアリーが t₁ お金を借りたのだと]ジョンが思っているのは][この銀行から]だよ?

B: いや、[Op [TP Δ]だと彼が思っているのは][あの銀行から]だよ

本章では、繫辞残留現象が助詞残留現象と全く異なる性質を見せるが、Sakamoto and Saito (2020) に基づいて繫辞残留現象を個別に分析すると、省略から派生されていることが分かった。

4. ノダ文 (In-situ Focus)

最後に、文を省略している残留現象（繫辞、補文標識）がノダ文 (In-situ Focus) から派生されていることを議論する。ノダ文とはその名の通り (26) のように文末が「のだ」で終わる文のことを指す。まず、先行研究において上述した以外の補文標識（ヨウニ、ノ、コト）は、助詞残留時に生起できないことが報告されている。

(26) 太郎は納豆を食べたのだ

- (27) a. A: 太郎が勝つように祈っていますか? B: *ように祈っています
b. A: 太郎が勝ったのを見ましたか? B: *のは見ませんでした
c. A: 太郎が勝ったことを知っていますか? B: *ことは知りません (藤井 2016)

藤井 (2016) は、これらの補文標識には、先行する述部が連体形でなければならないという性質があり、連体形を要求する接辞は残留できないという一般化を出している。もし通常の助詞残留現象が生じていると考えた場合、(28) のような内部構造が (27) に考えられるが、もしだとすると事実と反して(27) が文法的になると誤った予測をしてしまう。

- (28) a. 太郎が勝つように祈っています b. 太郎が勝ったのは見ませんでした
c. 太郎が勝つことを知っていました

そこで、ノダ文から「文を省略している残留現象」が派生されていると考える。すると、ノダ文にこれらの補文標識が後続している場合、連体形「な」であっても非文法的になることから、(27) の容認性を正しく予測することが出来る。

- (29) a. *太郎が勝つのだ{ように/のを/ことを}祈っています
b. *太郎が勝つな{ように/のを/ことを}祈っています c. *太郎は納豆を食べたのなのだ

また、繫辞残留現象においてもこれらの補文標識は非文法的であり、このことは、繫辞残留現象の省略箇所にはノダ文という内部構造が存在し、省略によって派生されていることを支持する。

- (30) a. A: 太郎が勝つように祈っていますか? B: *(な)ように祈っています
b. A: 太郎が勝ったのを見ましたか? B: *(な)のは見ませんでした
c. A: 太郎が勝ったことを知っていますか? B: *(な)ことは知りません

2章で扱った補文標識 (の/か/と) についても同様の分析が可能である。繫辞は音韻的に任意な派生を許される為、補文標識が残留している場合は全て (31) のように繫辞残留であると考えることが出来る。

また、非文法的な場合も、(32) のように「の」の残留が不可能であることに加え、補文標識を4つ用いた「のだから」は残留以外の場合も容認できないことから説明可能である。

- (31) a. A:花子は彼女の兄がそこにいたのだからジョンに尋ねたんだっけ? B:(だ) かビルに尋ねたんだよ
b. A:花子は彼女の兄がそこにいたのだとジョンに伝えたんだよね? B:(だ) とビルに伝えたんだよ
(32) a. *[Δの]かとビルに尋ねたんだよ b. *[Δの]かビルに尋ねたんだよ
c. *[Δ(だ)か]とビルに尋ねたんだよ (cf. *彼女の兄がそこにいたのだから...)

5. おわりに

本発表では、これまで助詞残留現象の一種であると考えられていた繫辞残留現象が全く異なる性質を持つことを観察し、繫辞残留現象を個別に観察すると省略から派生されていると考えることが出来ると議論した。また、文が省略されている残留現象（補文標識）も繫辞残留現象に分類されると主張した。本発表では至らなかったが、似た現象が短縮回答や縮約現象等、他の省略現象にも観察されることから、今後、認可条件やインターフェイス等も含め省略としてのさらなる研究が期待される。

6. 参考文献

- 藤井友比呂. 2016. 副文の構造と埋め込み補文の分類. 『日本語文法ハンドブッカー言語理論と言語獲得の観点から』村杉恵子、斎藤衛、宮本陽一、瀧田健介（編）2-37. 東京. 開拓社. / **Hankamer, Jorge and Ivan Sag.** 1976. Deep and surface anaphora. *Linguistic Inquiry* 7. 391-428. MIT Press, Cambridge. / **Hattori, Shiro.** 1949. Gutaiteki gengo tan'i-to chuusyooteki gengo tan'i. [Concrete linguistic units and abstract linguistic units]. *Kotoba* 2:16-27. / **Nasu, Norio.** 2012. Topic particle stranding and the structure of CP. In *Main Clause Phenomena: New Horizons*, eds. Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman, and Rachel Nye, 205-228. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. / **Saito, Mamoru.** 2015. Cartography and Selection: Case Studies in Japanese. *Beyond Functional Sequence*, ed. Ur Shlonsky. 255-274. Oxford University Press, New York. / **Sakamoto, Yuta, and Hiroaki Saito.** 2017. Overtly stranded but covertly not. Paper presented at the *West Coast Conference on Formal Linguistics* 35. University of Calgary. / **Sakamoto, Yuta, and Hiroaki Saito.** 2020. Joshi zanryuu genshoo [Particle Stranding Phenomenon]. Saito, Mamoru, Daiko Takahashi, Kensuke Takita, Masahiko Takahashi, and Keiko Murasugi (eds), *nihongo kenkyuu kara seisei bunpou riron e* [Generative Grammar from Japanese study]. Kaitakusha. 184-196. / **Sato, Yosuke.** 2012. Particle-stranding ellipsis in Japanese, phase theory, and the privilege of the root. *Linguistic Inquiry* 43. 495-504. / **Sato, Yosuke, and Jason Ginsburg.** 2007. A new type of nominal ellipsis in Japanese. In *Proceedings of the Fourth Formal Approaches to Japanese Linguistics*. ed. by Yoichi Miyamoto and Masao Ochi, 197-204. Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics. / **Sato, Yosuke, and Masako Maeda.** 2019. Particle stranding ellipsis involves PF-deletion. *Natural Language and Linguistic Theory* 37 (1). 357-388. / **Shibata, Yoshiyuki.** 2014. A phonological approach to particle stranding ellipsis in Japanese. Poster presented at Formal Approaches to Japanese Linguistics (FAJL) 7, National Institute for Japanese Language and Linguistics and International Christian University, June 27-29. / **Yamashita, Hideki.** 2019. Reconsidering the nature of particle stranding ellipsis in Japanese. In *Festschrift for Professor Tomoyuki Yoshida on his 60th Birthday*, ICU working paper in Linguistics 7, eds. Yurie Hara, Shigeto Kawahara, and Seunghun J. Lee, 79-91. / **吉田智行.** 2004. 主題の省略現象—比較統語論的考察『日本語教育学の視点』291-305. 東京堂出版.